

あたりまえの幸せを探そう

関川村立関川中学校 3年 大島 清 楓

“水道の蛇口を捻れば水が流れるし、電気のスイッチを押せば明かりが灯る”。それは、ごく当たり前のこと。皆さんは、この“あたりまえ”をどのように捉えていますか。

先日、私の住む地区で断水がありました。その日の午前8時から12時までの4時間にわたり、水の配給が止められたのです。

私は、水が使えなくなり、手を洗えなくなったことから、無駄に手を汚さないよう心がけました。私の祖母は、水が使えなくなり、調理ができなくなったことから、昼食の支度ができませんでした。お腹をすかせた祖父は、ラーメンを食べたいために、水が出るのを心待ちにしました。

断水という生活の変化により、私たちは、いつもとは違った4時間を過ごしました。それから、生活の中で「水が無かったら困る」と痛感できたのも、蛇口から勢いよく流れる水に感動を覚えたのも、この4時間の体験があったからです。

私は、毎日あたりまえに水を使えることは、とても幸せなことではないかと思いました。

私たちは、毎日の生活にたくさんの水を使用します。手を洗うときも、料理をするときも、トイレや浴室を利用するときも、また、喉がかわいたときも、水は私たちにとって必要不可欠です。

しかし、毎日の使用があたりまえだからこそ、その重要性を忘れてしまったり、水を大切にしなかつたりしてしまうのだと思います。

そこで、皆さんも考えてみてください。例えば、自分の家の水が、7日間使えなかったらどうしますか。過去に実際に、7日間の断水があった国があります。東南アジアのある国です。人々は、それぞれの生活のために、供給車で運ばれてくる水をもらいに行かなければなりません。ポリタンクをかかえ、長い行列に並ぶ…これを7日間続けるのです。長時間待つて得た“水”は、いつも見ていた“水”より、人々にとって貴重な存在に見えたことでしょう。

毎日、蛇口を捻る一仕草で流れ出た水が、いつもあたりまえに在った水が、急に得られなくなる。それを経験することで、人々はその存在の大きさに気づきます。

また、“あたりまえ”の習慣が遮断されることで、混乱が生じる場合もあります。先程の断水があったある国では、水を待ちくたびれ、怒った住民が、供給車に殴りかかるといった騒動が起きました。水が出ないというきっかけで、このようなパニックが起こったのです。

私は、日本でもこのような騒動が起こったら、多くの被害が出ると思います。例えば、首都東京での大規模な停電を想像してみてください。中枢機能が密集したこの都市では、電気は必須資源です。明かりが消えたり、機械の運動がストップしたりなどすれば、大変なパニックになると予想できます。電気という一つのエネルギーが止まるだけで、秩序に乱れが生じ、大変な事態を招いてしまうのです。

そう考えてみると、いつもあたりまえに電気が供給されていることは、とてもありがたいことだと私は思います。

私は、いつもあたりまえにあるものやいつもあたりまえにできることを、もう一度みつめ直してみるのはいかがでしょうかと考えました。私は、断水の経験から、水の尊さを学びました。少し考えてみるだけで、何かに対する感謝、誰かに対する感謝、また、喜びだって見つかるかもしれません。そして、いつもあたりまえだったものを、今まで以上に大切にできるのではないのでしょうか。

“水道の蛇口を捻れば水が流れるし、電気のスイッチを押せば明かりが灯る”。それは、とてもありがたいこと。皆さんもそうは思いませんか。

私は、このあたりまえの幸せがいつまでも続くようにそれらを大切にしていきたいです。